

糖尿病・内分泌内科

部長 浅羽 宏一

はじめに

2022年から糖尿病・内分泌内科として診療しています。4年目の2025年は特に大きな変化もなく日々の診療を行いました。火曜日と水曜日は浅羽が診療し、月曜日と金曜日は総合内科の中山修一先生が、水曜日には吉村江理先生がパートで糖尿病診療を手伝って下さっています。リウマチ・膠原病内科の公文先生と近澤宏明先生（水曜日、パート）も引き続き糖尿病診療をして下さっています。

外来診療

①糖尿病内科：当科は糖尿病療養指導士、糖尿病看護特定看護師、栄養士、薬剤師、理学療法士と協力してチームで診療に当たっています。当院は急性期病院であるため、内服薬のみの治療で血糖コントロールの良好な患者さんの診療は行っておりません。救急車で来院された重症糖尿病の患者さんも、落ち着けば自宅近くのかかりつけ医に紹介しています。近医に紹介した患者さんには、当院は糖尿病の専門知識を持った医療スタッフが充実しているので、かかりつけ医の先生方から年に1、2回検査や栄養指導、生活指導、服薬指導目的にご紹介頂き病診連携をしていますと説明しています。スタッフの不足などで、インスリン療法の導入が困難な医療機関から患者さんをご紹介頂き、外来でのインスリン療法の導入を積極的に行っています。今年も多くの先生方から患者さんをご紹介頂き、インスリン自己注射の指導、血糖自己測定の指導を行い、紹介元の医療機関へ御返ししています。今後も外来インスリン療法導入を積極的に行いたいと考えています。当院の糖尿病患者さん数は図1の様に経過しています。ここ数年は横ばいです。数年前から持続血糖モニタリングシステムを積極的に導入しています。今年度も持続血糖モニタリングシステムを積極的に導入し、患者数は増加しています。このシステムを導入しただけで、24時間いつでも血糖測定が可能であるため、患者さんに意識改革が起こり、血糖値を意識して食事や運動を行うため、内服薬などを変更しなくても血糖コントロールが良くなる方が多く見られます。図2に当院のインスリン患者さんの推移をお示しします。昨年に比べて増加しています。高齢糖尿病患者さんが増えているためか、インスリン治療中の患者さんは増加しています。今年は当院で初めてインスリンポンプを用いて1型糖尿病の患者さんの治療を開始しました。たった1例ですが、コントロールが良くなりましたので、今後症例を増やして行きたいと考えています。ただ、高額であるのに医療補助がないため、インスリンポンプを希望される患者さんが少ないのが現状です。

②内分泌内科：圧倒的に甲状腺疾患が多いですが、二次性高血圧の精査加療で開業医の先生方からご紹介を頂いています。甲状腺疾患ではバセドウ病が最も多く、その他甲状腺腫瘍、亜急性甲状腺炎の患者さんをご紹介頂いています。バセドウ病の患者さんは、開業医の先生からの紹介又は救急外来から紹介です。当院のバセドウ病の患者さんは図3の様に経過しています。メルカゾール1錠の維持療法のステージになれば、紹介先の医療機関へ紹介し、患者さんには年に1、2回血液検査やエコー検査に来院して頂き、病診連携を行っています。原発性副甲状腺機能亢進症の患者さんの紹介が増えていますが、骨粗鬆症の患者さんが増え（高齢者が増え）、ルーチンに血清Caを測定するようになったからと思われます。手術可能な患者さんは積極的に手術して頂いております。免疫チェックポイント阻害薬の副作用によるACTH単独欠損症、甲状腺機能低下症の患者さんは、当院の癌治療患者さんの増加に合わせて増加しています。

入院診療

①糖尿病内科：糖尿病緊急症である糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群を中心に主科として入院加療しています。循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、脳神経内科、血液内科で血糖コントロールに難渋する患者さんを併診して診ています。また、脳神経外科、整形外科、形成外科、泌尿器科、消化器外科の患者さんで周術期の血糖管理が必要な場合、併診して診ています。主科で診る患者さんは少ないですが、併診の患者さんは20名近くいますので、研修医と一緒に忙しく診療に当たっています。膵癌の患者さんが増えているため、膵性糖尿病で、インスリン療法を行う患者さんや、癌の化学療法などでステロイド療法を行う患者さんが増加しています。昨年からは、集中病棟での高血糖の患者さんに対して、積極的にインスリン持続静注療法を行い、集中治療における合併症の軽減に努めています。病棟スタッフもインスリン持続静注療法に慣れてきており、低血糖を起こすことなく安全に治療できています。

②内分泌内科：低Na血症、低K血症と言った電解質異常の入院患者さんの診療を担当しています。SIADHの患者さんが多いですが、中には副腎不全の患者さんも隠れているので十分な内分泌学的検査が必要です。年に数例ですが、下垂体機能低下症の精査加療入院の患者さん、原発性アルドステロン症精査の患者さんも入院されます。癌患者さんに対して免疫チェックポイント阻害剤を使うケースが増えていきますので、甲状腺機能低下症、下垂体機能低下症の患者さんも増えてきており診療に当たっています。今年も多くの研修医が研修に来てくれました。ありがとうございます。

今後の展望

糖尿病・内分泌内科としての常勤医は私ひとりであるため、私の外来担当日である火曜日と水曜日以外は多くの先生方に外来診療を助けて頂いています。出来れば糖尿病の診療ができる常勤医を一人リクルートして2人体制を取りたいと考えています。糖尿病外来は1型糖尿病や2型糖尿病でもインスリン療法を行っている患者さんを中心に診療し、月曜日から金曜日まで外来をして、いつでも糖尿病患者さんを診療できるようにしたいです。強化インスリン療法で血糖変動の激しい、コントロール困難な患者さんに対して、持続血糖モニターとインスリンポンプの併用を行いたいと考えています（今年は1例導入しました）。病棟では糖尿病看護特定認定看護師が増えてきていますので、指示書を活用して看護師サイドでインスリン量を調整する体制を整えたいと考えています。

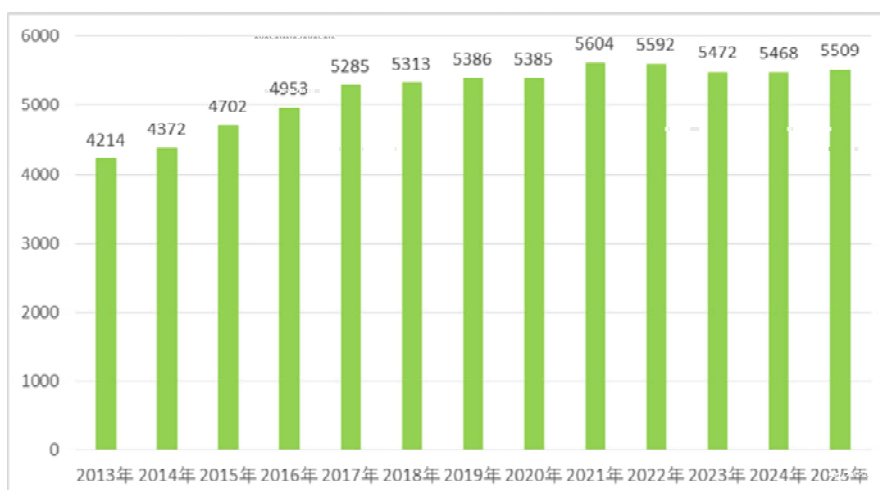


図 1 糖尿病実患者数

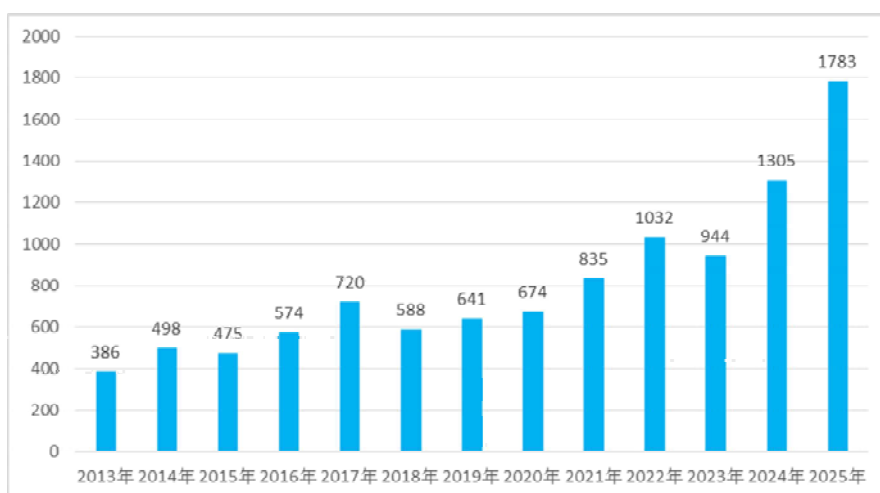


図 2 インスリン治療中の患者数

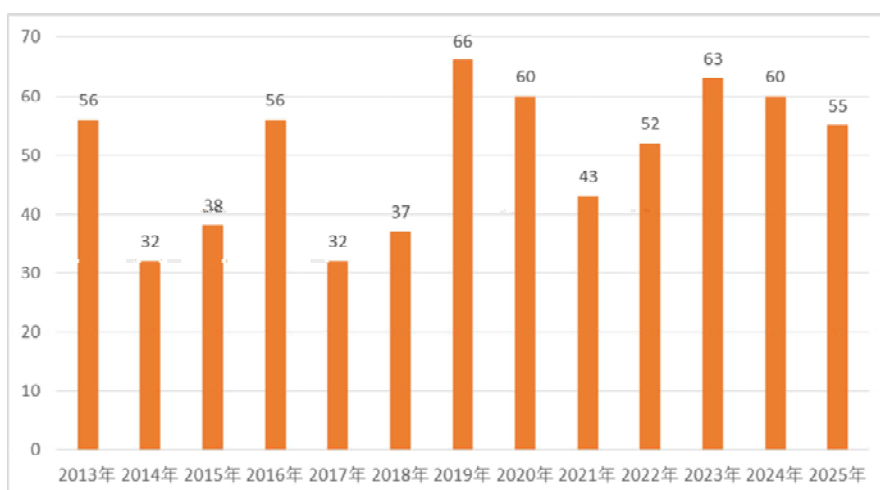


図 3 バセドウ病患者数

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
アルコール多飲による低 K 血症性ミオパチーを呈した 2 型糖尿病の 1 例	丑本 知大、篠原 雅幸、熊谷 千鶴、丸山 博、西岡 達矢、浅羽 宏一	第 78 回高知県医師会医学会	8 月 16 日 高知
偽性クッシング症候群を合併した肺非結核性抗菌症の 1 例	浅羽 宏一、中岡 大士、松田 莉奈、井萱 俊希、中山 修一	第 25 回日本内分泌学会四国支部学術集会	9 月 6 日 香川
不明熱の精査にて甲状腺 MALT リンパ腫と診断した 1 例	井萱 俊希、中山 修一、浅羽 宏一	第 25 回日本内分泌学会四国支部学術集会	9 月 6 日 香川
メトホルミン塩酸塩過剰内服後頻回の血液透析で救命したが、その後糖尿病性ケトアシドーシスを発症した一例	宇都宮 慧、松田 莉奈、吉村 和修、浅羽 宏一	第 55 回日本腎臓学会西部学術大会	10 月 11 日 ～12 日 奈良
糖尿病透析予防指導を行い腎機能が維持している 2 型糖尿病患者への療養支援	岩井 千代美、浅羽 宏一、中山 修一	日本糖尿病学会中国四国地方会第 63 回総会	10 月 31 日 ～11 月 1 日 愛媛
精神科単科の病院と連携して血糖コントロールを行った 1 例	伊與田 美香、浅羽 宏一、中山 修一	日本糖尿病学会中国四国地方会第 63 回総会	10 月 31 日 ～11 月 1 日 愛媛
糖尿病性ケトアシドーシスで救急搬送された 40 歳代 2 型糖尿病男性患者 4 例の検討	池田 裕菜、浅羽 宏一、井萱 俊希、中山 修一	日本糖尿病学会中国四国地方会第 63 回総会	10 月 31 日 ～11 月 1 日 愛媛
免疫チェックポイント阻害薬により糖尿病を発症した 2 例	井萱 俊希、中山 修一、浅羽 宏一	第 35 回臨床内分泌代謝 Update	11 月 7 日 ～8 日 長野
脂肪肝による急激な肝腫大を伴ったアルコール性膵炎患者に発症した糖尿病性ケトアシドーシスの 1 例	秋澤 麗菜、浅羽 宏一、大川 良洋、井萱 俊希、中山 修一、栄枝 弘司	第 133 回日本内科学会四国地方会	11 月 29 日 香川

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ